

# 芦生研究林上谷歩道沿いにおけるマルバマンサク葉枯れ病の調査

芦生研究林 長谷川敦史

## 1. はじめに

ここ 10 年ほどの間に、マンサク類の葉枯れ病が全国的に拡大している。この葉枯れ病は菌（カビの一種）によって引き起こされると推測されているが、はっきりとした原因は判っていない。この原因不明の病気は 5 月の中旬頃から発生しはじめ、初期症状は葉の基部周辺の一部が褐色に変化するが、数日から一週間程度で褐色部分が全体に広がる進行の早い病気である（写真 1、写真 2）。

1998 年に愛知県で発生したものが最初の確認例とされているが、現在では、高知県から福島県まで被害が確認されており、芦生研究林でも 2007 年頃から被害が目立ち始めた。この葉枯れ病は野生種だけでなく園芸種にも広がっており、マンサクを“ネソ”と呼び木の結末などに珍重する地域では、この病気によるマンサクの減少が危惧されている。年々拡大する被害を少しでも把握することを目的に今回の調査を行った。

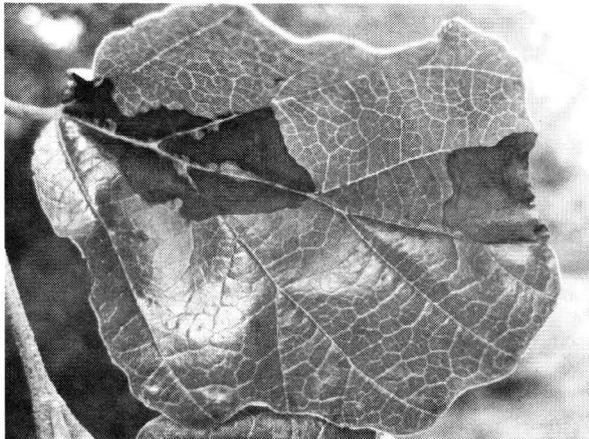


写真 1 葉枯れ病の初期段階



写真 2 葉枯れ病の末期状態

## 2. 調査地と調査方法

比較的短時間で広範囲を調査できる由良川源流部の上谷歩道沿い(谷から見える斜面を含む)を調査地に設定し、そこに生育するマルバマンサクを対象樹木に 2009 年 8 月 17 日に調査を行った。調査地は天然生林主体の上谷流域の谷部で、上谷歩道は長治谷作業所から杉尾峠までの全長約 4km、標高 640m～760m の比較的なだらかな緩傾斜地をなしている。調査方法は葉枯れ病の発生状況を葉の目視により判別し、病気の進行度合いに応じて 3 つに区分した。

## 3. 結果・考察

葉枯れ病の進行状況を樹幹全体の葉がほとんど枯れているもの（全感染）、一部は枯れているが正常な葉も残っているもの（一部感染）、感染のないもの（正常）の 3 段階に区分した（図 1）。

調査地に生育しているマルバマンサクは全 39 本であり、それぞれの内訳は全感染が 6 本（全体の 15.4%）、一部感染が 33 本（同 84.6%）、正常なもの（同 0%）が 0 本であった。調査地内のマルバマンサクはそれほど多いものではないが、そのすべてが葉枯れ病に感染していた。この調査結果から病気の蔓延が確認された。本調査では一部感染が約 85%と高く、葉を付けている個体が多数を占めていた。一度感染を受けると遅かれ早かれ全体に広がるという葉枯れ病

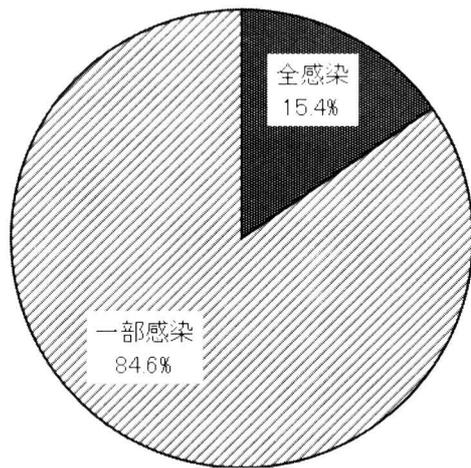


図1 マルバマンサク葉枯れ病の割合

イボ状に肥大した虫えい（マンサクメイボフシ）（薄葉 2003）がいくつか見られ、この影響で翌年の正常な芽及び葉の数が減少し、ますます個体の衰弱が進行する可能性もある。あるいは、この虫えい形成者であるマンサクイボフシアブラムシの体内にこの葉枯れ病を引き起こす病原体が存在し、マンサクとの接触によって病気が発症することも考えられる。

#### 4. おわりに

今回の調査は 8 月中の 1 日のみであり、この病気の発生開始である 5 月からの経緯が把握できていない。さらに詳細なデータを得るためには、病気の発生開始頃からの継続的な調査・観察が必要である。

また芦生研究林に生育するマンサクの葉枯れ病を把握するためには調査面積やデータ量を増やさなければならない。今後データを蓄積することで詳細な報告ができればと考えている。



写真3 マンサクメイボフシ

#### 引用文献

薄葉重（2003）虫こぶハンドブック．文一総合出版．40